

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | “プレイバック” : 推理小説界における歴史的老衰 |
| Author(s) | スミス ブレット, |
| Citation | 日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1990 : 171 - 176 |
| Issue Date | 1991-03-01 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039294 |
| Right | |
| Relation | |



「プレイバック」 - 推理小説界にかけた歴史的老衰

スミス・ブレット

文学界の中では、推理小説の歴史より驚くべきものがないだろうか。欧米の最初の、いわゆる探偵的な小説が1841年に刊行され、日本最初のものは1923年に刊行された。その歴史は毎年の立場から長くはないが、世界的にはとても流行った。今でもおそろしく文学の中で一番人気がある分野であろう。日本では最近、大きなブームを博している。例えば、推理小説の刊行は平均ひと月小説30部、短篇小説40部である。その上、毎年何億部を越えている。欧米では、イギリスのアガサ・クリスティは世界で一番翻訳された、刊行された作家で、聖書以外には英語で書いてあるベスト・セラー・リストの一位を占めていり、クリスティの発行は何億部を越えている。その他にも有名な話がよく推理小説から映画やテレビ・ドラマにされている。例えば、日本では、横溝正史の「悪魔の手毬唄」、松本清張の「石川硬貨」などはテレビ・ドラマに改作された。欧米では、アメリカのハールド・ボイの作家のハメットとチャンドラーの小説、「マルタの鷲」、「大いなる眠り」などが人気があつた。もちろん、ドイツのシヤールロック・ホームズやクリスティの小説が、有名なドラマや映画に改作されたことは言うまでもない。

1841年2月より、イギリスのディケンズと言う作家の「バーナビー・ラッシュ」の小説が連載された。推理小説風趣向を盛った長編で、アメリカのエドガー・アラン・ポーは連載第一回を読んだだけで犯人を当てたという。そして、その4月、ポーが自ら主宰する「グレイム」誌に「モルグ街の殺人」を發表し、これは世界の現代推理小説の始祖といわれている。「モルグ街の殺人」のあと、ひきつづいて「マリー・ロジェの謎」、「黄金虫」、「お前が犯人だ」、「盗まれた手紙」により、ポーは推理小説のヴァリエーションの原型を確立した。1866年、フアンズのガボリアは「ルルージュ事件」を書いた。家庭の醜聞を主とする新聞小説の流れをひくものの、本格的な推理小説としては世界初の長編とされる。さらにガボリアは、「書類百十三」、「河畔の悲劇」、「ルコック探偵」において各探偵ルコックを活躍させた。

東洋では、日本の推理小説の生成は明治時代以降まで待たねばならなかつたのである。しかし、古くは中国「韓非子」など法家の書物、さらに「棠陰比事」などに含まれる犯罪に関する挿話が、東洋文化圏に属する日本の推理小説の趣味をつちか、てきたといえる。ことに、「棠陰比事」は、これをヒントに西鶴が「本朝碁陰事」を書いたといわれ、いわゆる「比事もの」の代表格である。

江戸時代の末期に、神田老平がオランダのクリステマイルの短編ニ
篇を訳し「和蘭美政録」と題した。これは稿本だが、本邦初の翻訳推
理小説であり、明治に入ってから前半が、そして昭和になつてからは
後半が、西洋の有名な作家、すなわちポー、ドイル、コリンズ、A・
K・グリーン、フリーマン、チェスタトンなどの作品と共に翻訳され
た。

明治時代に入ると、欧米の推理小説が不進歩をとげた。コリンズが
「月長石」を著して、T・S・エリオットがこれを評して「イギリス
ス探偵小説の最初にして最高のもの」と述べた。1870年、ドイル
の「ストランド」が初めて本格的な推理小説を意図して、「エドウィン・ドル
ードの謎」に着手したが、その年、彼が急逝したため中断され、その
書は「未結末」をめぐって様々な推測がなされている。1878年
には、推理小説の歴史の中で新しい推測が見られる。A・K・グリー
ンの「リーヴェンズワース事件」と言うのは、アメリカ初の、また、
セ流作家による最初の長篇推理小説であり、のちに英国の首相ポール
ドウィンの愛読書と喧伝された。

1887年、ドイルのシャーロック・ホームズも第一作が刊行さ
れ、おそらく今日でも世界の一番有名な名探偵が登場した。ただし、
刊行時には大した反響は呼ばなかった。もともと、ホームズは一躍世
に現れたが、3年間に読切短編の連載が「ストランド」誌
に始まり、人気が決定的となった。その上、ホームズの物語が強い影
響を与えた。例えば、1893年もう一人のベーカー街の名探偵セク
ストン・ブレイクが初めて登場した。多くは短く通俗的であるが、
200人近くの作家によって書き続けられ、今日までに総数4000
を数える世界一長大なシリーズに発展した。一方、ドイルはホームズ
を執筆に嫌気がさし、作中でのホームズを死なせたため、読者から、ご
うごうたる非難を浴びた。この頃、英米で一定の主人公をもつ連続短
篇推理小説が盛んに執筆され、M・P・シールのザレス公爵をほいめ
多くのキャラクターが次々に登場した。英米で長篇推理小説が主流と
なる1920年代までの間、いわゆるホームズ風の短篇推理小説が栄
えたわけでは、この期間を「ホームズのライヴァル達時代」と称する
ことがある。刺激されたドイルがすぐホームズを復活させ、自分の死
までホームズ物語を刊行した。

明治時代の末期にもう二人のイギリスの名探偵、すなわち干エスタ
トンのブラウニング神父とフリーマンのリーニグ博士が登場した。小
柄で丸顔のブラウニング神父のシリーズは、干エスタトンの特有のパラドキ
シカルな論理を展開するもので、ある意味では現代推理小説の祖とも
いわれる。フリーマンの創作したリーニグ博士には、科学的捜査の
を旨とし、厳格な実験によって一歩一歩謎を解いてゆくプロセスがあ
り、そこにもう味がある。量的には長篇作品が圧倒的に多いが、短篇
は犯人側と探偵側の双方から二部立てで描く倒叙法と呼ばれる新し
い形式を採用している。この手法は、現代の人気テレビドラマ「刑事
コロンボ」などにも見られる。

黄金時代

1920年から1940年までは、欧米の推理小説の黄金時代がようやく到来した。といわれる。その上、日本近世推理小説の時代がようやく行われた「殺人犯」「二銭銅貨」が概して日本の最初の推理小説といわれていられるが、江戸川乱歩の「二銭銅貨」が黄金時代のミステリ史をあらわしている。もう一つ、1913年に刊行されたベンツの「トレントの最後の事件」について少しふれておきたい。これは従来の推理小説への皮肉をこめて執筆されたものだ。性格描写に優れ、結果的に1920年代の長篇推理小説の繁栄のきっかけを作った記念碑的な作品となった。兎は、多数の評論家やミステリ小説のファンに「トレントの最後の事件」と呼ばれている。

それにもかかわらず、1920年クロフツが「樽」、及びクリスティが「スタイルズの怪事件」でそれぞれデビューして、本格長篇推理小説の全盛期、いわゆる「黄金時代」が幕を開けた。大体1920年代前半は英国圏の探偵小説の時代——「赤毛のレドメイン家」、ミルンの「赤い館の秘密」等、一般文壇作家による可憐な推理小説の作例が相次ぐ。1923年、英国のフィルポットの「赤毛のレドメイン家」のミルンが「赤い館の秘密」等、一般文壇作家による可憐な推理小説の作例が相次ぐ。1926年、またクリスティは「アクロイド殺人事件」を発表して、その大胆なトリックが論議を巻き起こした。（兎は1917年ウーセが「アクロイド」の星博士の日記で同じトリックが初めて使われた。）「アクロイド」の同じ年、アメリカではヴァン・ダインが「ベンリン殺人事件」で華屋のゴとく現れ、一夜でアメリカ探偵小説は成り上がったと言われている。それから1920年代後半に2人の有力なアメリカの作家が登場した。本格派の巨匠クィーンが「ローマ帽子の謎」でデビューする一方、ハメットが第一長篇「赤い収穫」でハードボイルド派の金字塔をうちたてた。（殺人が非常に多いので、これは時々「血の収穫」と翻訳されている。）ハメットと彼より有名な後任者のハードボイルドの作家のチャンドラーがいろいろな好転を試みた。一つは、複雑な謎に基いた本格的な推理小説は大体史体的ないことであるが、殺人は本当に現実的な問題であろう。例えば本格派のアガサ・クリスティの作品を見ると、ア割が毒殺事件だと言われている。それだけでなく殺人はエリートの中流階級にしか起こらないようである。謎もゲームとして扱う傾向があった。そして最後の解決が知性が入り、読者をうれしがらせるであろう。しかし、ハードボイルドの小説の謎解きを読むと、読者は憂うつになる。殺人は（人間）人命の浪費なのであるから。推理小説の中でリアリティーを創作してみたことだけでなく、特にチャンドラーが推理小説を大衆文学より高い水準にあげてみた。ハメットとチャンドラーは日本の推理小説の社会派の松本清張に似ている。その人のテーマは社会の進歩や組織的な犯罪や政治的な腐敗などを含んでいる。

1930年代に入ると、最後の本格派の巨匠カー（アメリカ）が登場して、E・S・ガードナーの弁護士ペリー・メスン・シリーズが開始した。フランスのシムノンも彼の有名なメグレ・シリーズを書き始め、ロス（ニクイーン）が「Xの悲劇」、「Yの悲劇」ニクイーンが「エジプト十字架の秘密」と続けて傑作を発表した。この時点ではいとど同士の合作であること及びロスがニクイーンの名義であることは一般には伏せられていた。

日本では「黄金時代」の間に「新青年」と言う推理雑誌が1920年に創刊されて、その3年後乱歩の「二銭銅貨」が雑誌に掲載された翌年乱歩が「二癡人」、「双生児」等一作ごとに名声を高め、作家専業を決意した。それから乱歩が「D坂の殺人事件」で名探偵明智小五郎を創造して、引き続き「心理試験」、「屋根裏の散歩者」、「人間椅子」等を発表した。1925年の夏には初の短篇集「心理試験」を出版し、既に日本推理小説界第一人者の地歩を築いていた。1928年暫く休筆していた乱歩が「陰獣」で復活して、その宣伝に早くも「懐しの乱歩」の文言が使われた。

本格推理黄金時代から社会派の時代へ

英米でアガサ・クリステイ、エラリー・クイーンら本格推理の巨匠が登場した1920年代前後を黄金時代と呼ぶのに倣って、日本でも横溝正史、高木彬光らが相次いで秀作長篇を発表した昭和20年代を黄金時代と称している。だが、日本の黄金時代は永くは続かなか、た。実際には「幻影城」昭和53年6、7月合併号に発表された「日本長篇推理小説ベスト99」を見ると、昭和0年代の小説は5部しか選ばれなくて、昭和10年代もまた5部が選ばれたのみで、（小栗虫太郎の「黒死館殺人事件」、夢野久作「ドグラ・マグラ」を含まず）昭和20年になると、9部しか選ばれなかった。昭和0年代を江戸川乱歩の時代と言え、昭和20年代は横溝正史の時代と呼ぶべきであろう。この9部の中で正史が3部を著いて、この中には1947年に出版された「本陣殺人事件」、1949年に発表された「獄門島」が含まれている。しかし昭和20年代後半になると何も挙げられていない。

昭和25年には、戦前から探偵文壇の牙城であった雑誌「新青年」も廃刊している。「…前年末より強化されたインフレ抑圧政策の余波は出版界にも及び、年初来刻々不況の度を増して夏期に至ってその極点に達し、さすば「新青年」も売行き不振、遂に7月号を限りとして、一時休刊の止むなきに至った」（原文は正字、江戸川乱歩「幻影城」昭和26年、岩谷書店）

代ってこの時期、隆盛をきわめたのはむしろ翻訳物であった。昭和22年ごろから、占領軍当局の翻訳に対する態度がきびしくなり、翻訳出版は事実上不可能となっていたと、24年末にF、T、フォルスターによる仲介業務が始まり（うちタトル商会と合併）、翻訳ミスターリ叢書が妍を競った。新樹社のぶら、く選書、雄鶏社のふんどり

み可てりい、ハヤカワ、ミステリーの前身とな、下世界傑作探偵小説シリーズ、月曜書房からは個人全集としては初めて『シャーロック・ホームズ全集(延原謙訳)、日本出版協会の異色探偵小説選集、スペレオン選集などが20年代後半に出揃った。

今のは余談ではなく、そうした叢書によ、て近現代の欧米作品に作家も読者も馴染んだことが、昭和30年代に日本ミステリ(その外から探偵小説でなく推理小説と呼ばれ始める)が示した活況の大きな原動力とな、たはずだと言いたい。横溝正史や高木彬光の初期作品は、まだ戦前の怪奇探偵小説の面影を引かず、ていた。

江戸川乱歩賞が公募に切替えられての最初の当選作、仁木悦子の「猫は知っていた」がクリスティー流の健全明郎なミステリとしてベストセラーになり、前後して「点と線」など一連の作品をひ、上げて松本清張が推理小説界に登場する。清張作品によ、て社会派推理小説が開幕したわけだが、正史、彬光らに代表される謎解き、犯人さがしを主題とする本格派と、社会派とは必ずしも対立概念ではない。本格推理は小説構成の様式の一つだが、社会派は作家の創作姿勢による分類だから、この二つは両立も可能なわけで、現に「点と線」は社会派でありと同時に本格物の傑作でもある。(というより「点と線」に限、て言えば、初刊本あとかきで作者みずから認めるように、かわからう主張である犯罪動機重視よりも本格推理的要素、ほうが勝、ていす)ただ、清張の行き方があまりに斬新だ、たために、社会派の面ばかりが強調されたにすぎない。

「一般的に、昭和30年代は社会派推理小説の時代」と言われているが、実際には、この時期にデビューあるいは代表作を発表した佐野洋、三好徹、結城昌治、笹沢左保、陳舜臣、土屋隆夫、鮎川哲也等の作品を誦読して、どこに社会派推理を感じるであろうか。確かに何人かの作家、松本、水上勉、黒岩重吾には社会派と呼ぶ事、出来一面があるが、この時期の推理小説全体を俯瞰してみると、社会派推理小説が、主流というよりは、むしろ、本格、サスペンス、ユーモア、その他あらゆるタイプの推理小説が試みられたと言うべきであろう(山前謙「戦後推理小説の転機」、『読書月刊』昭和60・11)というのは正論ながら、その「何人かの作家」が、旺盛な創作量、せいもあ、て、この時代の推理小説界に占めるウエイトが非常に大きい。影響力も甚大で、高木彬光が「白昼の死角」などで社会派への転換を試み、また30年代の最後尾に連なる西村京太郎が社会派推理から登場したことなどを見ても、30年代を社会派時代と便宜的に呼称するのは妥当なではあるまいか。

昭和40年代の収穫は、清張の系譜を直接追う——というより、社会派からさらに風俗派に変容して行、て作品群よりも、むしろハードボイルド、スパイ小説に見出される。どちらも30年代に、前者は大藪春彦、河野典生らによ、て、後者は中園英助、結城昌治らによ、て播種されたもので、それぞれ生島治郎、三好徹などによ、て発展してゆく。

昭和51年に入ると、名探偵や密室に限らず、「ミステリーイ、カクテル」に書かれたさまざまな項目で事情がそれまでと異な、てくる。

(6)

その前年、50年2月号から創刊された雑誌「幻影城」は、探偵小説の代替名称として推理小説という呼称が定着して久しいのに取って「探偵小説専門誌」と銘打ち、当初は主に戦前から清張以前までの作品をリバイバルしていたが、やがて新人賞を設け、そこから輩出した作家たちによって密室短篇は再び活況を呈し始める。

世界の推理小説が時に物すごい評論と向かい合っていたりして、変化して、成功して、今まで魅力を持っている。日本では主な傾向が3つあった。最初は本格探偵小説、その次は社会派と呼ばれる推理小説、最後に1976年から新古典調時代といわれる推理小説。欧米でも推理小説の型が確定されていなくて、分類しにくい。だけどどうして、同時にそんなに酷評された、下くさんの人にとって魅力があるのだろうか。一つの理由は、平凡やへたな小説を發表しすぎた。もう一つは推理小説は大体殺人に焦点が集まるから、精神的高揚の文学には全然なれない。しかしほとんども皆はミステリーに興味がある。
「推理小説」にさよならという方法はいまだに見えられていない。